

# 全施連 ニュース

発 行 者  
 一般社団法人  
 全国知的障害者施設家族会連合会  
 理事長 由 岐 透  
 編 集  
 全施連広報部会  
 住 所  
 〒650-0016  
 神戸市中央区橘通 3-4-1  
 神戸市立総合福祉センター内  
 ☎078-371-3930

## 紅葉の札幌に六四八人が集い 障害者に一貫した生涯支援を

### 10月22・23日全施連全国大会を開催

平成25年度の全国知的障害者施設家族会連合会全国大会が北海道札幌市のホテルライフフォーと札幌で10月22日(火)・23日(水)の二日間に亘って開催され、全国各地から六四八名(北海道四三二名)が参加しました。

基調報告、シンポジウム、全員参加型の討論会等最後まで熱気溢れる大会となり、最後に北海道から次年度開催地の愛知県へ、シンボル旗が手渡され、盛会裏に閉会となりました。

開会に先立ち、北海道知的障がい児者家族会連合会長石川誼の歓迎の挨拶、次いで一般社団法人全施連理事長由岐透の開会の挨拶があり、続いて来賓の挨拶に移り、北海道

知事(福祉地域局担当・内海敏江氏代読)、札幌市長(障害福祉環境局長・瀬川誠氏代読)、公益財団法人日本知的障害者福祉協会会長橋文也氏、一般社団法人北海道手をつな

ぐ育成会会長奈須野益氏から、それぞれ心温まる祝辞を戴きました。由岐理事長は開会挨拶で「障害のある人が、一人の市民として認められ、平等に暮らしていく、そのため

### 基調講演 一 埼玉大学 宗澤 准教授

### 『新しい生活施設の在り方』

### 三つの提案・具体例の発表

基調報告で埼玉大学宗澤准教授は、安心して生涯を見通すことの出来る暮らしの根拠地としての『新しい生活施設の在り方』に関する提言を受けて、三つの提案、具体例を挙げて講演されました。

◆少子高齢化の進展を見据えた施設

◇北海道新得町の取組みについて  
措置時代に福祉施設が都道府県の監督下にあった時代から、北海道新得町では福祉施設を社会資源として捉え、社会福祉法人厚生協会が施設を増やして行く時に法人の負担がゼロになるように、特別の財源支援の条例を作って施設作りを志

の環境を社会の責任で整えて行く」このような新しいビジョンを掲げ、更に幅広い方々と連携して切り開こう」と会場に呼びかけました。



新得町は人口が9月現在六五〇五人であり、14の事業所の福祉関

援している。これは驚異的なことで

連の支援者並びに家族が二〇〇人でおよそ人口の五分の一が福祉関連事業のもとで暮らしを支えています。

わかふじ寮(視覚障害者施設)がコンピューター制御の最新木工機械を設備して、一流ホテルの家具多くの木工製品を製作している。

そこで働く知的障害者が生活しているGHは残業等もあり、就業時間等も異なるため、長い歴史の中でバス・トイレ付きの個室になっています。

### ◆小規模化した近代核家族の困難を克服できる施設

施設は障害のある人が生涯を終えるまで、看取りと弔いまで責任を持つて支援することが当然と考えている。

障害のあるなしにかかわらず私達にとっても障害には様々な困難があります。

現在は親子が離れて暮らすことが普通になってきています。この状況の中で、親の努力だけでは障害者が安心した暮らしを保障することは困

(以下、2ページ上段に続く)

難であり、誰もが安心して暮らせる

障害者施設を作る必要があります。

新得町の社会福祉法人厚生教会は障害者施設だけでは看取りと申

全施連が求めている「血のつながりによらないけれども、慈しみ合い、

◆埼玉県のアスポート事業

生活保護世帯で育った子どもが、大人になって再び保護を受ける「貧困の連鎖」を防ぐために教育OBな

その支援を受けた中学生、高校生が特養のボランティアになつてい

これを障害者施設に広げることが出来るのではないかと考えてい

ます。

◆施設における虐待

施設で虐待があるから施設を解体せよという主張があるが、施設をなくしたら別のところで虐待が

援を施設に丸投げしている状況で起きやすいと思つています。

◆退出可能な親密圏と施設をコアにした社会資源を構想する

豊かな地域とするための社会資源を一步一步作り、ひどい施設やGHや家族から退出できる仕組みを作ることが大切です。



シンポジスト

北九州市立大学

教授 小賀 久氏

埼玉大学

准教授 宗 澤 忠 雄 氏

福岡県知的障害者施設

保護者会連合会

会長 八 木 トミエ 氏

神奈川県知的障害者施設

保護者会連合会

副会長 嶋 田 芳 樹 氏

北海道障害児者家族会連合会

副会長 平 山 盛 司 氏

ファシリテータ

全施連副理事長

南 守 氏

シンポジスト各氏の発言要旨は次のとおりでした。

▼八 木 トミエ 氏

知的障害者にとって親が当事者として動けなければ、政治は動かないことを再認識して、仲間を増やし諦めずに願いの実現に力を尽くそう。

▼嶋 田 芳 樹 氏

すぎな家族会会員の40%が親で50%が兄弟姉妹であり、親の年齢が80歳を超えているので保護者会への出席がままならない。兄弟姉妹は現役であり出席が難しい。

このような状況の中で神奈川県保護者は、保護者会等活動の活性化に向けて交流会を企画している。

2歳年下の弟も私も高齢化しているが、後々、娘に負担を掛けたくない。

このような悩みの無い障害福祉制度を求めて行きたい。

▼平 山 盛 司 氏

- ・医療無料化
・介護保険料負担の免除
・施設利用契約制度廃止
・GH, CH利用者は優先的に入所施設に戻す
・医療行為が必要な場合の終の住処が必要 以下略

▼小 賀 久 氏

家族の頑張りや解消する必要がある。日本の施設はまだ不完全で利用者が不憫だと親が感じている。

デンマークではそのような不憫さを持つていないので、自然に会いに行ける。

▼宗 澤 忠 雄 氏

知的障害者の支援は障害の特質を踏まえた支援をすること、知的機能では計れない生活上の困難を解消して、支援することが必要である。

▼南 守 副理事長

家族会の活動を活発にしていきたい。施設をより良くしていきたい、という家族としたら具体的な説明がほしいという事でしようが、講師はそのためにはもっと広い視野でいろんなことを考慮する必要がある現状であると述べている。ここで施設に対する要望等があったらコメントを...

▼八 木 トミエ 氏

施設は事情によつて最後の看取りまでしてくれているが、看取りを基本とするよう、きちんと約束を求めている。健康保持のための方策が必要だと思つている。

▼嶋 田 芳 樹 氏

創立当時は終の住処にするということだったが今はそうではない。長期入院等に対して施設だけで対応するのは無理。今の制度では何もできないだろう。報酬単価を削るような施策は止めるべき。

▼平 山 盛 司 氏

単独法人で看取る場合は複数の施

設で連携し、見取りの出来る施設作りをすべき。

二日目…全員参加型討論会

終の住処はどこですか

家族会・支援施設でも議論を尽くそう

二日目は、前日の基調講演やシンポジウムの発言を基に、由岐理事長の「終の住処」に関する考え方、また、岩本副理事長の利用している施設及び神奈川県の実情の説明の後、南副理事長から統括施設長をしている「あじさい園」は看取りまで含めた施設作りを目的としてきたという説明があった後、会場の参加者との討論に入りました。

Q (愛知県) デンマークの消費税や税負担はどうなっているのか?  
A : 由岐理事長

税金は 35%、消費税は 25%。高いように思えるが国民は税金は政府に預けていると考えており、必要な時に支援して貰えるので将来の生活の心配はしていない。

Q (福岡県) 施設は立派に地域であり、利用者の家であるということ厚労省に認識させることが必要だ。

それで初めて看取りなどが可能になると思う。  
A : 回答略

Q (神奈川県) 看取りとは死ぬことではなく、死に至るまでの道のりが看取りだ。単身者や家族の希望によって、施設内の弔いもしている。  
A : 南副理事長

死に向かう過程全体を看取りと言ひ、発達期を越えたら看取りになるという考え方もある。  
Q (三重県) 総会の前に慰霊塔の前でお経を上げている。医療が伴う利用者者がでた場合も利用できる施設を作ったかどうか。入所施設の新設を県議会に請願したら、議員全員一致で採択された。

Q (兵庫県) 母親の立場から述べたい。終の住処とは施設しかないが施設は医療が最も不足している。医療の充実が願いだ。重症身障児

施設の新設に知的障害者枠をお願いしている。  
A : 南副理事長

施設の新設は埼玉も実施したように不可能では無い。障害福祉計画策定に採択されるように行動することが大切。  
Q (北海道) 施設の中で利用者と職員が家族的な関係を築き上げるには。家族の概念は?

A : 由岐理事長

一人での生活は出来ないので集団生活の中での人間的生活は何かを考えて行きましょう。

SS SS SS SS SS

会場全体を熱気の渦に巻き込んだの討論が続きましたが、岩本副理事長の「本日の討論を機に、今後県単位等でこの議論は続けて行って欲しい。」との言葉で二日間の全国大会を終わりました。

「新しい生活施設の在り方」終の住処はどこか―全施連PTの提言の理解を深め、広げ、全施連の組織も一回り大きくなるために、《知は力、教は力》の運動と、来年の愛知大会での再会を誓い合いな

がそれぞれ地域に帰って行きました。



家族会一体で施設も共に最善の支援を求めて

神奈川県やまばと家族会 水谷 敦

全員参加型討論会で、南副理事長が宗澤・小賀両氏に「家族会に対する要望」を聞いた。

これに対し両講師とも「施設であれ、グループホームであれ、支援施設側とよく話し合い、個々の障害者の障害に対応した支援を日常生活の中に生かしていく。この試行錯誤を繰り返す中で、最善の支援が出来るような家族会を目指してほしい」とかく、自分の子供のことだけを考えがちであるが、どの子も同じように障害を持っているので、家族会が一体になって、支援施設側と対応

する必要がある。

個々の人の態様等に応じた適切な支援が行えるかどうか、障害者福祉の原点であり、その方向に向けての努力が家族会に求められているのではないかと、ということであった。

教えられることの多い実りある大会でした。

「知的障害をもつ人の生涯を考える」の大会テーマに集い

愛知県 山本 勇

北野大地札幌での今大会、取り巻く環境の厳しい中ではあるが、集う人の熱気が天に届いたかのような好天に恵まれ、充実した実り多い大会であった。

今、大会を振り返り、基調講演で、我々の求めている「血のつながりによらないけれども、慈しみ合い、支えあう暮らしの根拠地としての施設」を作っていく縁を、地域社会に具体化するべき段階にある。と語られた言葉の具体的実践に、自らが何ができるか、何をすべきか、を反芻している。